近　況　報　告

この機関誌も第４号を数え、今春入ゼミ生で８期生を迎えることになります。今年卒業する５期生まで含めると、現在の卒業生は35名（自発的留年の平井君と浅井君を除く）になりました。

これまでの卒業生は、多様な分野で活躍中です。現役生も含めて、相変わらず国家公務員志向が強い（これまでに、農林省・公取委・防衛庁・通産省・郵政省・経企庁、さらに国公ではないが、日銀・京都市役所・高山市役所・群馬県庁、圧巻は工学部大学院に進んだ中野屋君[２期生]の宇宙開発事業団）ようですが、東京三菱銀行に入行した藤原君[２期生]が、昨年12月に同行を退社後、シルバー産業関連のベンチャー企業に飛び込むなど、今後の君たちの身の振り方は、私たちの世代とは随分と違った選択肢がある、ないしは取らざるを得ないのでしょう。既婚者も増えてきました。２月には、田中みゆきさん[3 期生]が結婚し、伊藤みゆきさんになりました。

今春入ゼミする９名が卒業する３年後には卒業生は63名に上る予定です。

さて、私もこの３年間で、以下の１～３冊まとまった本を出すつもりでおります。

① １冊目は、すでに有斐閣と交渉中で、うまく行けば来春「アルマ・シリーズ」の１冊として書店に並ぶはずです。１、２回生向きの国際経済学の教科書（仮題『グローバル・エコノミー』）で、いま人選でモメています。

② ２冊目は、私の恩師である伊東光晴教授が岩波書店にもちかけたそうで、某財団からの補助金を申請しているらしいプロジェクトで、「反新古典派近代経済学」のテキストです。私たち以降の世代の若い研究者で組織されています。

③ ３冊目は、これは完全な単著で、今までの研究を纏めていく過程で発見し、そのまま放置しているテーマを新たに進めていこうとしています。これが、今後時間を見つけて取り組んでいこうとしている最大のテーマです。仮題は以下の通りです。

『国際資本移動と国際通貨システム』

序章　「国際通貨システム論」の新しいパラダイムー「貨幣」と「通貨」の違いー
１．国際通貨論の「進化論的アプローチ」ー国際通貨の「サーチ・モデル」ー
２．国際資本移動の経済学ー国際資本移動におけるネットとグロス、および「フェルドシュタイン＝ホリオカのパズル」を中心としてー
３．資本自由化の順序ー「宇沢＝浜田の命題」の再考察ー
４．途上国における金融自由化の現実―「マッキノン＝ショウ・モデル」の現実妥当性―
５．通貨危機モデルの現実妥当性ー「シャドウ為替レート・モデル」は有効かー
６．「マンデル＝フレミング・モデル」再考ー小国モデルと大国モデルー
７．円の国際化の経済学ー東アジアにおける「バスケット通貨制度」の可能性ー
８．最適通貨圏とユーローEUにおけるconvergenceとcohesionー
終章　《経済のグローバル化＝古典的資本主義》の根本問題としての「所得分配の不平等」

１と７は本機関誌所収の拙稿に未定稿として一部掲載しますが、まだ雲をつかむような状態です。２と５は、やはり本機関誌所収の清谷論文と藤嶋論文にヒントがあるはずです。全ての項目に手を着けていますが、今のところ、全てが10%未満の進行状況ですので、限界生産力はまだまだ逓増状況です。現役生や院生の誰かが、これらのテーマのうちどれか

一つでも一緒にやってくれると、助かるのですが。

先程述べた３つのプランは、いずれも皆さんに対して公約する段階ではありません。どこまでプランが進行し、どれが公約として実現可能かは、次回の機関誌における近況報告でお知らせできればと思っています。

さて、昨年の近況報告で書いた公約は、全て果たしました。1999年は、私の研究歴において一区切りついた時期でした。春に「経済学博士」の学位を取得し、秋には「教授」に昇任しました。また、９月には『IMF資本自由化論争』（監訳,岩波書店,¥1,600）を、10月にはこれまでの集大成である『ケインズと世界経済』（岩波書店,¥5,400）を上梓しました。

前者には、新聞等で署名入りの好意的な書評が３本掲載されました。伊東光晴教授（『毎日新聞』1999年10月10日）、内海孚教授（『日本経済新聞』1999年11月28日）、入江恭平教授（日本証券経済研究所『証券経済研究』第23号2000年１月）です。

後者は大著ですので、現在のところ、部局が違うために一面識もない間宮陽介教授（『エコノミスト』1999年12月28日号）が、過分な評価をして下さった書評には、大いに力づけられました。あと、山本栄治教授が『経済セミナー』に、藤田誠一教授が『世界経済評論』に、それぞれ今春書いて下さることになっています。

私信でもいくつかも「大物教授」からのコメントをいただきましたが、小宮隆太郎教授からのものは、我が家の額入りもののでした。

この１年は私にとってgood yearでもbad yearでもなく、surprising yearでした。

昨年のゼミは、関西学院大学の鈴木克彦ゼミ、大阪大学の阿部憲三ゼミ、神戸大学の藤田誠一ゼミ、高崎経済大大学の矢野修一ゼミと、４大学とのインゼミ・ディベートが秋から冬に集中し、その期間、私の研究室は活況を呈した、というより、私の居場所はなく、サークル部屋と化し、朝講義のために出向くと、数名のゼミ生が仮眠を取っている、という有様が続きました。一昨年もそうでした。今年もおそらくこんなところでしょう。

私にとっては、研究・教育・啓蒙・大学行政など、連関しているが、矛盾もしている状況で、何とかバランスを図りながら、あと最低でも10年は研究主体で生きていこうと思っています。間に在外研究を挟もうと目論んでいます。

さて、今春卒業の５期生は、これまでにない意味でユニークな顔ぶれでした。２人が自発的留年、１人は帰国、１人は院入試合格を蹴って何と某学部へ再チャレンジ、民間企業への就職は１人だけなど、日本経済の停滞ぶりを素直に反映した進路選択でした。

その中にあって、昨年自発的留年をし、今春から経済企画庁へ行くことになった４期生の清谷君と、昨秋見事な成績で大学院入試に合格し、学部の岩本ゼミからは初めての院生となるゼミ長の藤嶋君には、このゼミのアカデミック・レベルを維持してくれたことに対して、敬意と感謝を表します。おっと日銀の久田君を忘れてはいけない。３人には、官庁エコノミスト・中央銀行エコノミスト・学会エコノミストとして、これから10年後、20年後の活躍がみものです。

今年は「青竹会」が開かれる年です。前例からすると、９月15日でしょうか。皆さんからどんな朗報が聞かれるか楽しみにしています。私もsurprising newsではなく、good newsをお届けできるように努力していきます。

2000年２月10日

岩本　武和